

令和 5 年 5 月 27 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02566

研究課題名(和文)21世紀転換期以降のカナダマイノリティ文学における「笑い」の手法とその政治的戦略

研究課題名(英文)Politics of Laughter in Contemporary Canadian Minority Fiction

研究代表者

戸田 由紀子(Toda, Yukiko)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40367636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、21世紀転換期以降のカナダマイノリティ文学における「笑い」の手法とその政治的戦略を考察した。21世紀転換期以降のマイノリティ文学に「笑い」の手法が用いられるようになったことに着目し、それが複雑に働き続けている権力構造へ問題提起し、社会正義を提唱する有用な手立てと成り得ることを示した。本研究では、「笑い」の手法がどのように支配者側の設定した枠組みに揺さぶりをかけ、不平等を維持するその権力構造に問題提起し、既存のステレオタイプを打破し、また、どのような癒しと和解の可能性を提示しているかを考察することで、「笑い」の手法とそのポリティクスを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、先住民およびアジア系、ムスリム系の文学研究に貢献するだけでなく、今まで軽視されてきた「笑い」の手法の持つ力を見出すことができることにある。またカナダのビジブル・マイノリティ、先住民、白人作家による作品を比較分析する本研究は、一つの集団に焦点を当てて考察されてきたカナダのマイノリティ文学研究のパラダイムシフトを促すとともに、マクロに働き続けている社会の複雑な権力作用を浮き彫りにできる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the techniques of laughter and its political strategies in Canadian minority literature since the turn of the 21st century. The "narrative of victimhood" conveyed by traditional Canadian minority literature has been reincorporated into the dominant discourses as historical tragedy, turning a blind eye to the power effects that continue to work in more subtle ways. This study focuses on the use of laughter in Canadian minority literature since the turn of the 21st century and indicates how laughter is used as a narrative device to raise questions about the complex power structures at work and advocate for social justice. To do so, this study examined how the strategy of laughter (i) challenges the framework set by the ruling power, (ii) raises questions about the power structures that maintain inequality, (iii) breaks down existing stereotypes, and (iv) offers possibilities for healing and reconciliation.

研究分野：英語圏文学

キーワード：カナダ文学 マイノリティ文学 笑い ムスリム系カナダ文学 アジア系カナダ文学 Hiromi Goto Za
rqqa Nawaz Margaret Atwood

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

北米マイノリティ文学研究は、アメリカでは1960年代の公民権運動、黒人運動、第二波フェミニズム運動によって、カナダでは1971年「多文化主義」政策が押し進められたことによって盛んに行われてきた。研究のアプローチの仕方は多様だが、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、そして階級による差別によって排除されてきた人々の主体的なアイデンティティがいかに表象されているかといった基本的な共通課題が見受けられる。研究代表者は、アフリカ系およびアジア系を中心とした北米マイノリティ文学に描かれる被抑圧者の経験が、どのように語られ(語りの技法)どのように表象されているかを中心に研究を進めてきた。

平成26~29年度の科学研究費補助金(基盤研究C)では、カナダの「多文化主義政策」が人種差別をより見えにくくしたという議論(Lai, Compton, etc.)を踏まえながら、21世紀転換期以降のカナダ西海岸の非白人(ビジブル・マイノリティおよび先住民)文学が、従来の被害者であることを伝える伝統的移民物語から変化したことを示した。被害者であることを主張する物語は、支配者側のディスコースに再び取り込まれてしまう(Miki, Kamboureli, Elliott)。そこで当該研究では西海岸を代表する作家ウェイド・コンプトン、ラリッサ・ライ、マドレン・ティエンの作品を取り上げ、主流社会に包摂されることを回避しつつ、巧妙に働き続けている権力作用を浮き彫りにする物語手法および言語行為を明らかにした。

興味深いことは、21世紀転換期以降のカナダマイノリティ文学において、特定のマイノリティ集団に限ることなく、「笑い」の手法(“terrodis,”“dark humour,”“satirical comedy,”“aboriginal humour”)が社会正義を訴える戦略として用いられていることだ。カナダ文学において従来「笑い」は白人の領域とされてきた。それはカナダの最も面白い文学作品に与えられる文学賞 Stephen Leacock Memorial Medal for Humour の受賞作家がすべて白人であることを鑑みると明らかである。もちろん非白人文学に「笑い」の手法が全く用いられてこなかったわけではない。先住民作家 Hayden Taylor が指摘するように、「笑い」は先住民文化および文学の一部である(Hayden 2005)。にもかかわらずマイノリティ作家からユーモア文学賞受賞者が出ないのは、彼らの「笑い」が主流社会の視点から理解されてこなかったという理由に加え、悲劇的な歴史を語る彼らの作品に「笑い」が適切だと考えられてこなかったことがあげられる。

しかし21世紀転換期以降、「笑い」の手法はカナダの先住民文学に限らず、カナダのマイノリティ文学全般に見られる一つの傾向となっている。とりわけ insider/outsider の両視点を備えた新移民や若い世代の作家たちによる作品に顕著にみられる傾向といえる。ムスリム系映像プロデューサー・作家ザルカ・ナワズの手がけた作品が、タブー視されてきたムスリム社会の女性差別やテロの話題を「笑い」を用いて表現し、それが『赤毛のアン』以来の大ヒット作となったことは、「笑い」の手法が、1990年代以降のカナダにおける人種について語る事が難しくなった状況を打破する有用な手立てと成りうることを示している。そこで本研究では21世紀転換期以降のカナダマイノリティ文学における「笑い」の手法とその政治的戦略を考察したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、21世紀転換期以降のカナダマイノリティ文学における「笑い」の手法とその政治的戦略を明らかにすることである。従来のカナダマイノリティ文学が伝えてきた「被害者としての物語」は、悲劇が過去に終わったとして支配者側のディスコースに再び取り込まれ、より巧妙な形で働き続けている権力作用から目を背けてしまう。本研究は21世紀転換期以降のマイノリティ文学に「笑い」の手法が用いられるようになったことに着目し、それが複雑に働き続けている権力構造へ問題提起し、社会正義を提唱する有用な手立てと成り得ることを示す。「笑い」の手法がどのように支配者側の設定した枠組みに揺さぶりをかけ、不平等を維持するその権力構造に問題提起し、既存のステレオタイプを打破し、またどのような癒しと和解の可能性を提示しているかを考察することで、「笑い」の手法とそのポリティクスを明らかにする。

3. 研究の方法

カナダマイノリティ文学における「笑い」の手法とその政治的戦略を明らかにすることが本研究の目的である。そのための具体的な研究方法は以下3点である。

「笑い」の定義と理論について書かれた先行研究を概観した上で、従来白人の領域とされてきたカナダ文学における「笑い」の手法を把握するために、ユーモア文学賞受賞作にみられる「笑い」の手法を分析する。

21世紀転換期以降のムスリム系、先住民、アジア系、アフリカ系カナダ文学における「笑い」の手法の政治的戦略を、従来の伝統的移民物語形式で書かれた作品と比較しながら考察する。

の白人作家と の非白人作家による作品を比較考察することで、現代マイノリティ文学における権力構造への問題提起と癒し・和解に向けた「笑い」のポリティクスを明らかにする。

4. 研究成果

21世紀転換期以降のカナダマイノリティ文学における「笑い」の手法とその政治的戦略に関する以下4本の論考を発表した。

(1) Hiromi Goto の作品にみられる笑いの戦略

(「オバアチャンの『笑い』: ヒロミ・ゴトの『コーラス・オブ・マッシュルーム』」)

ヒロミ・ゴト(Hiromi Goto, 1966-)のデビュー作『コーラス・オブ・マッシュルーム』(Chorus of Mushrooms, 1994)は、「笑い」に満ちている。それは従来の日系カナダ文学には見られない特徴である。第二次世界大戦時に強制収容された日系カナダ人の体験を綴ったジョイ・コガワ(Joy Kogawa)の『オバサン』(Obasan)を始めとした従来の日系カナダ人文学には、日系移民たちの苦労をリアリスティックに綴ったものが多く、「笑い」の要素はほとんど見られない。一方、日系人家族三世代の女性たちの物語である『コーラス・オブ・マッシュルーム』は、諷刺、ユーモア、ドタバタ喜劇、駄洒落、奇想天外な言動など、「笑い」の要素がふんだんに用いられている。『コーラス・オブ・マッシュルーム』で一貫して用いられている「笑い」は、特定の個人を笑う排他的なものではなく、一緒になって笑う「笑い」である。本考察ではこの作品における4種類の「笑い」を分析し、これらの「笑い」がいかに「オバアチャンの人生を文化的に縁取った社会の構造を打ち壊し、未来に向けて創造的可能性を広げ」ているか、そしていかに「オバアチャンの人生のつつまじやかな出来事を『注目に値するもの』として印し、それを『非凡なもの』として変容」(Goto, "Folklore" 13)させているかを明らかにした。

(2) Kim Thúy の作品にみられる笑いの戦略

"Life is 'Tragic and Comic at the Same Time': Kim Thúy and Her World"

Kim Thúy の *Ru* は、時系列に沿って書かれていない。意識の流れという物語技法を用い、語り手であり主人公であるベトナム難民グエン・アン・ティンの記憶をたどり、ベトナムとカナダでの体験を多角的に捉えている。*Ru* は、単に個人の物語ではなく、ベトナム戦争とその余波に翻弄された人々の集団的な物語/歴史である。*Ru* は悲劇的な状況に置かれている人々の物語であるにもかかわらず、それらがユーモアを組み合わせられて紹介されている。しかしそれは読者が人間の残酷さや人間の悲劇を受け入れやすくするために意図的に用いた戦略ではなく、「それがまさに人生」そのものだからだと Kim Thúy は説明する。本論では「人生は、悲劇的であると同時にコミカルでもある」(Toda 43)といった考えに至った経緯が、Kim Thúy 氏がこれまで経験してきたことや、見聞きしてきた出来事に起因することを示した。

(3) Margaret Atwood の作品における笑いの戦略

「マーガレット・アトウッドの "Wicked Tales": ミソジニーとエイジズムと『ぞっとするような笑い』」

アトウッドの *Stone Mattress* の短編も同様に、「老い」や「死」の悲劇的な側面だけではなく、喜劇的な側面も強調し、身体的には衰えても、精神的には衰えることのない老人たちの姿をコミカルに描き出している。しかし *Stone Mattress* で展開する「笑い」の特徴は、"darkly funny stories" (*Literary Review*), "darkly funny tales" (*Vogue*)と評されているように、その極めてダークな「笑い」にある。ダークと評されるのは、これらの短編が「復讐」という重いテーマを用いて、タブー視されてきた年配の人々に対する差別を指すエイジズムと女性蔑視や嫌悪を指すミソジニーをサティリカルに暴くからだと考えられる。

Stone Mattress の5つの短編の女性主人公たちは、皆、10代、20代の頃に付き合っていた男により、人生を大きく狂わされる。しかし彼女たちは、グリム版のフェアリーテールでお馴染みの、誰かに助けを求めたまでひたすら待つ「若くて美しい」女性主人公ではなく、自らのウィットと "devious mind" でもって、半世紀以上彼女たちを苦しめてきた相手に報復する。タイトルストーリー "Stone Mattress" で展開される主人公 Verna の「ぞっとするような笑い」は、古代から脈々と続いてきたミソジニーへの抵抗とそこからの「解放」の表明だと言える。本論ではこれまで議論されてきたミソジニー定義を踏まえた上で、アトウッドの *Stone Mattress* が、ミソジニーへの抵抗とそこからの解放を描いたリベンジ物語集であることを示した。

(4) Zarqa Nawaz の作品における笑いの戦略

"The Politics of Humour and the Comical: Zarqa Nawaz's *Little Mosque on the Prairie* and *Laughing All the Way to the Mosque*"

パキスタン出身のカナダの作家・映画監督ザルカ・ナワズ(1967-)は、作品を通じてムスリムに関する誤解、誤認、誤報を取り除こうとする。ナワズは、サスカチュワン州の架空の町マーシーに住むイスラム教徒コミュニティを描いたコメディ番組 *Little Mosque on the Prairie*

(2007~2012年)を制作し、イスラム文化のスポークスパーソンとして知られるようになった。彼女は、カナダでイスラム教徒に対する人種差別的なステレオタイプが根強く残っているのは、彼らの生活様式がマスメディアで十分に表現されていないためだと考える。そして「コミュニティとして、自分たちの表現について黙っているのではなく、自分たちのイメージを作るために積極的に行動しなければならない」(Radhika)と主張している。そこでナワズは、固定観念の打破するために、イスラム教徒の日常生活のさまざまな側面を描き、紹介する。初期の短編映画から一貫して、イスラム教徒にまつわる2つの中心的なステレオタイプ(1)テロリストの容疑者としてのイスラム教徒やアラブ人、2)抑圧されたイスラム教徒の女性を描き、脱構築し続けているのだ。

ナワズは意図的にコメディを作る。そして政治的に敏感な問題であればあるほど、笑いを強調する。イスラム教徒がテロリストとしてプロファイリングされ、イスラム教徒の女性が「抑圧されている」といったステレオタイプをあえてユーモアで誇張し、笑いによってイスラム教徒に対する誤解を取り除く。笑いは、現状を疑い、タブー視される問題を語るための空間を開くための有効な政治戦略として作用する。コメディを通して、イスラム恐怖症やイスラムとテロの関係など、「普通なら心を開こうとしないような問題に人々の心を開きたい」(CBCラジオ)とナワズは主張する。本論では、ナワズの作品に見られるユーモアとコミカルさについて考察した。本論ではナワズは笑いを戦略的に用いることで、政治的にデリケートな問題を語るための空間をこじ開け、ムスリムに対する一般社会の固定観念を打ち破り、それらを脱構築していることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 戸田由紀子	4. 巻 29
2. 論文標題 The Politics of Humour and the Comical: Zarqa Nawaz 's Little Mosque on the Prairie and Laughing All the Way to the Mosque	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 カナダ文学研究	6. 最初と最後の頁 77-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸田由紀子	4. 巻 52
2. 論文標題 マーガレット・アトウッドの "Wicked Tales" : ミソジニーとエイジズムと「ぞっとするような笑い」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集	6. 最初と最後の頁 114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Toda	4. 巻 51
2. 論文標題 Life is "Tragic and Comic at the Same Time": Kim Thuy and Her World	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 椋山女学園大学研究論集	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 戸田由紀子	4. 巻 25
2. 論文標題 オバアチャンの「笑い」：ヒロミ・ゴトーの『コーラス・オブ・マッシュルーム』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『カナダ文学研究』	6. 最初と最後の頁 111-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸田由紀子	4. 巻 49
2. 論文標題 死者について物語る：イーデン・ロビンソンの『モンキー・ピーチ』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『椋山女学園大学研究論集』	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 戸田由紀子
2. 発表標題 「マーガレット・アトウッドの“Wicked Tales”：『老い』と『死』と『ぞっとする笑い』」
3. 学会等名 カナダ文学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

カナダ・ニューブランズウィック州の文学：アントニン・マイエの作品とユーモア http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/event/assets/docs/48f7651e0f6a8e8d489858f4b580d07cca38f05c.pdf , http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/news/detail/post-973.html
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------